昭和51年5月9日第三種郵便物認可　昭和62年11月1日発行（毎月一回1日発行）　ISSN 0385-5457

HIMALAYA

ヒマラヤ

No. 192

1987 NOVEMBER

日本ヒマラヤ協会
THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN——HAJ

1988年
HAJ登山隊員募集

東コンロンの雄峰
新青峰(6,860m)—未踏峰

チベットと青海省に跨がる世界の屋根、青蔵高原には恰も宝石をちりばめたように無数の湖水が点在します。その一つ可可西里湖の北にひっそりと聳える東崑崙の秘峰が新青峰（別名モノマハ、6,860m）です。

記

時　　期　1988年5月～7月
（本年の偵察結果により時期を変更した）
募集人員　10名
負担金　100万円
資　　格　冬山経験4年以上のHAJ会員（会員外の希望者は別途協議します。）
申込み先　HAJ事務局まで
〆切り　定員になり次第〆切ります。

東部カラコルムの玉峰
リ　モ(7,385m)—未踏峰

HAJでは来夏、東部カラコルムに残こされた最後の玉峰とも云うべきリモI峰（7,385m）へインド登山財団（IMF）との合同で登山隊を派遣することになりました。

つきましては、下記の通り登山隊員を募集しますので、参加希望の方は、HAJ事務局までお申込み下さい。

記

時　　期　1988年6月～8月（約70日間）
募集人員　3　名
負担金　120万円
資　　格　ヒマラヤ登山の経験のあるHAJ会員
〆切り　定員になり次第〆切ります。

表紙写真

ゲニ峰登山を終了し、8月14日雨の降る中を熱柯の部落へ戻った。翌日から2日間青空が広がったのでゲニの頂を一度見ようと再度峠まで行ってみるがダメだった。東方に連なる未踏の岩峰、氷河のある山々、おもしろそうな山群だ。（ゲニ峰登山隊）

ヒマラヤ No.192

1. 神の山、ゲニ峰　残してしまった課題
15. ヒマラヤニュース＜地域ニュース・トピックス・インフォメーション＞
18. ヒマラヤ登山入門　インド・ヒマラヤ編(5)
21. 連載 中国の少数民族(7)　アリ(阿里)のチベット族　山森欣一
24. 寸感・事務局日誌

残してしまった課題

飛田　和夫

７月13日。午後になって風が強まり風と共に左右に揺れ動くテントの中で、シュラフに体を半分程つっこみ、視点の定まらないままに見上げていた。隣では同じ様な格好をしながらも読書に集中している娘。テントの上方四隅から取ってあるヒモに、ネッカチーフ、手袋等掛けてあるが、テントが揺れ動く毎に、乱舞している。

視覚が定まらなくとも、頭の中がカラッポでも、唯、現実の結果だけは鮮明だった。ゲニ峰登山は終了し、「登れなかった」「敗退したのだ」と。

成都を発つ時より雨が降ったり、止んだり、晴れたりしつつも、ＢＣ付近からは完全に悪天候となり連日雨と雪が続き、Ｃ１での霧雨と濃霧が漂い視界が奪われた時などは魑魅魍魎の世界に引きづり込まれてしまったのでないかと、畏怖の念さえ感じるほどだった。が、天候にせよ、時期、期間等々が登山の結果におおきな要因として生じるのは明白だが、結果は歴然としていた。

何故、これ程までにゲニ峰の敗退が白紙同様の脳細胞をかけめぐるのだろうか。舞うネッカチーフのごとく、心が揺れ動いた時機が計画の段階であったからだと自問自答する。

現在までの何回かの高所登山では、高さに関係なく全力を注いできたし、今回のゲニ峰も同様に奮起していたが、転職と山関係の種々多忙が重なり、計画の進行、チームの育成、技術の向上とツアー的登山に絶対させない、更に、自の今後のいきざまのステップと私考していたにもかかわらず、軟弱さも加味され基本的行動が揺れ動いていた。

そんな期間、状況に機敏な先輩より、私の不安な行動について教示の暗示を受けるが、一度で気付くことが出来づ、「転職したから」「多忙だから」、そんなことは遠征に関係ない、事故が発生した際に「悔いのない対応が」「悔いのない処置が」。なにより「悔いのない登山が出来るか・・・」と激怒され、やっと隊の沈滞の原因に気付く醜態ぶりであった。

再度、以前の遠征の様に計画を遂行し実践したのだが、結果は悪天候だったとはいえ「敗退」で終った。敗退を考えると、計画時での心の葛藤が台頭し、このことも原因の一つではなかったかと、揺れ動くネッカチーフと同じ心境にさせられてしまった。

帰路、明年の許可取得をさせて頂いた。企画段階での重要性を持続させ、新たなる再ステップの礎とする為にも、明年は「残してしまった課題」を解決したい。

隊員構成

隊長	飛田 和夫	(41才)
副隊長	永尾 剛士	(36才)
隊員	江尻 健二	(54才)
	遠藤 京子	(女・49才)
	柴崎 裕代	(女・40才)
	林 清剛	(38才)
	小原 博	(38才)
	小沢 隆明	(37才)
	長谷川喜久男	(30才)
	伊藤 哲朗	(30才)
	安田 素彦	(30才)
	山崎健二郎	(29才)
	飛田 真樹	(女・14才)
(現地スタッフ)		
連絡官	王 馬 特	(31才)
通訳	胡 徳 友	(41才)
コック	朱 毅 平	(32才)

行動概要

7月25日　成田－北京－成都

前夜、事務所で全隊員による夕食会。早朝、宮崎久夫会員の御好意により隊荷（別送品無し）をトラックで箱崎。山形の新青峰偵察隊9名と合流。遠藤会長代行、山森事務局長が見送り。

成田をJL 781便（10時発）。機内での冷たいビールで爽かな酔いを感じると、毎度の事ながら出発前の多忙から解放されながらも、新たにゲニ峰初登頂と全員無事帰国させるための緊張感が甦る。北京には定刻の14時頃着。空港には中国登山協会から王海銀氏、通訳の趙建軍氏が出迎え。

成都への乗継ぎCA 4106便（北京発17時55分）が遅れの為に、北京市内の北緯飯店へ。通訳が李豪傑氏に変る。北京を23時55分に発つ。

7月26日　成都（準備）

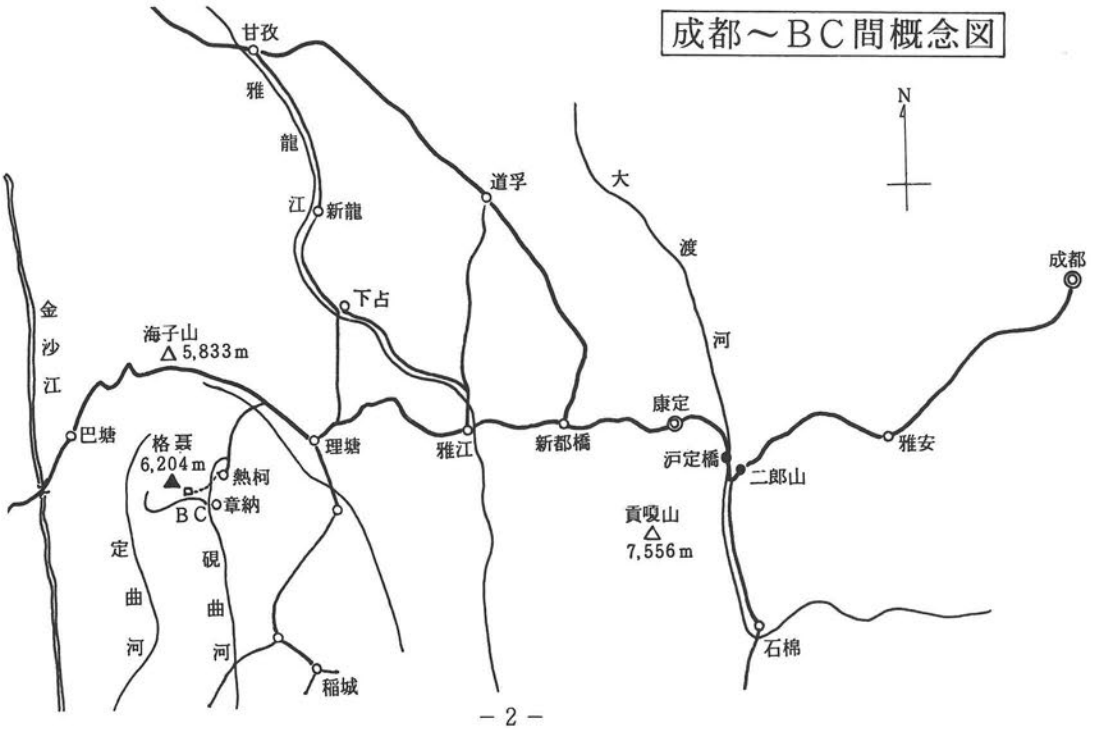
成都着2時30分。四川省登山協会の曽大迸副主席、憑有栄女史、ゲニ隊の王馬特連絡官と胡徳友通訳の出迎え。

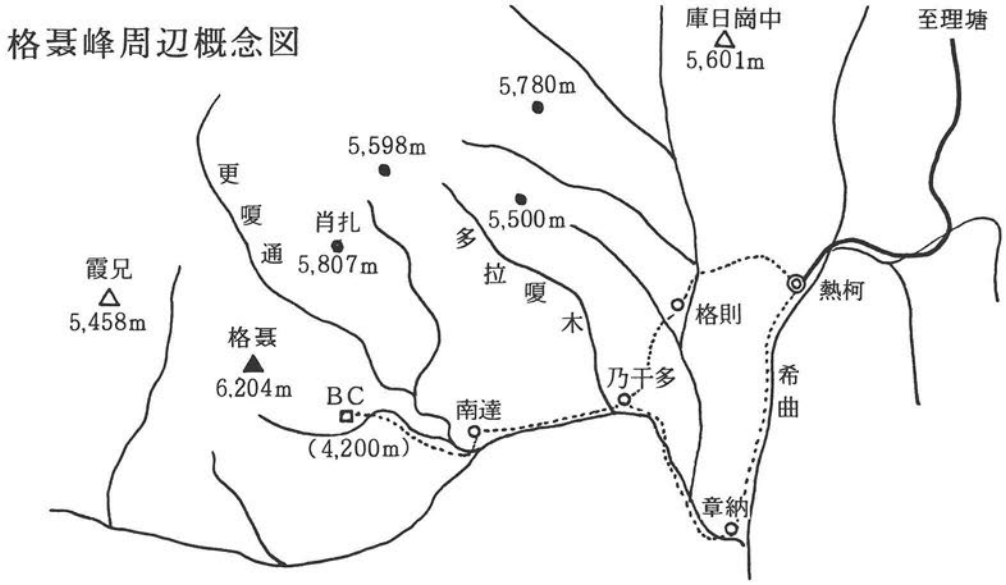
午後、隊の準備がほぼ終了後、上記の各氏と江硯都外事科長と私で打合せ。①雅江には入れない。②雅江～理塘間は洪水の為に通行止め。詳しくは康定でとの事。他は問題は無かった。夕方、登山協会主催の歓迎パーティー。趙国英主席も同席。

7月27日　成都－康定

沪定橋を過ぎ、大渡河から宣水(シエンスイホー)河に入る付近で康定登山協会の付法(フーファー)氏が出迎え。夕食後、登山協会にて打合せ。周昌健主席、会計の黄占珍氏と先程の付氏、王連絡官と胡通訳に私。①18日に熱柯まで行き打合せをしてきた。②大雨による洪水で

成都～BC間概念図





雅江～理塘は通行出来ない。したがって雅江～甘孜～理塘になるが、雅江～甘孜間は連絡が取れて通行出来るが悪路になり２日間程かかる。甘孜～理塘間は行ってみないと通行の不可は解からない。③雅江は入れないし、当然宿泊出来ない、の内容。

②について、甘孜～理塘間が通行不能の場合は、甘孜付近の代替の山、チベットからの大迂回路の提案をするが、当然ながら全て難かしいとの事。最終的にはその時に王連絡官と相談となる。

７月28日　康定－雅江

早朝、理塘から来たというトラック、情報を入手し、康定－雅江－下占（テント泊）になり出発。雅江に入り、用事の為に人民政府に行った王連絡官によると、下占まではかなりの時間が費やされ途中には食糧も入手出来ず、宿泊も出来ない。大雨という自然条件で予定ルート変更になった為、もし、よければ宿泊しても良いとの事になる。宿泊させてもらう事にし、招待所に入る。その後、人民政府の３名が訪ねてくる。

７月29日　雅江－下占－理塘

雅江から雅龍江沿に下占、南下して理塘へ。体育委員会の韓茂全氏が待つ。連絡官、通訳と私で打合せ。①四川省全体の大雨で道路が寸断、理塘にも充分な補給がされてない。したがって熱柯での食糧は隊で準備してほしい。②８月１日は理塘で馬の祭り？が開催されるので、各地から多くの人達が集まってきている。トラブルが無いよう。上記の件で充分なもてなしは出来ないが、歓迎します、との事であった。

７月30日　理塘－熱柯

種々あったが予定の日程で熱柯入り。熱柯区長の阿呷彭措、書記長の日隆各氏と住民が出迎え。理塘県体育委員会の韓氏は登山期間中も全て同行。

７月31日　熱柯（高所順応行動）

８月１日　熱柯～南達、ヤク19頭、馬方６名

８月２日　南達～ＢＣ

８月３日～13日　登山活動。帰路準備

８月14日　ＢＣ跡～熱柯、ヤク10頭、馬方３名

８月15日　熱柯（隊荷整理）

８月16日　熱柯（自由行動）

８月17日　熱柯－理塘

８月18日　理塘－康定

８月19日　康定－雅安

８月20日　雅安－成都（午後、隊荷の整理）

８月21日　成都

市内観光。夕方、ＨＡＪ主催の答礼会を錦江飯店で開催。体育委員会・登山協会の方々を招待。

８月22日　成都－北京

北京の北緯飯店に入る。夕方、中国登山協会主催の歓迎会、主席の史占春氏、西蔵自治区体育運動委員会主任の洛桑達瓦方々に招いていただく。

８月23日　北京－成田

JL 784便（北京14時30分）－成田18時20分で全員無事に帰国。

行動記録

柴崎裕代

初めての海外・ゲニ峰登山

日本ヒマラヤ協会ゲニ峰（未踏峰・6,204 m）登山隊は13名。内３名はＢＣ迄。飛田隊長の娘の真樹ちゃんも参加。真樹ちゃんは新聞でも取り上げられる。ゲニ峰は成都からラサに通じる川蔵公路が、金沙江（揚子江）にさしかかる手前の、理塘～巴塘間の南にある。'86年10月の偵察の時の写真では、東南稜が長い長方三角形をしている。どっしりとして、象が寝ているようにみえる。

成田～成都

７月25日成田を出発。北京に２時に着く。空港から市内に向う道路は延々と続く一本道。両側に三重四重の街路樹が有り、緑がとてもきれい。市内は人、人、人。２連のバスも満員。日本の通勤ラッシュ並。バスは道路を人の間をぬって走る。北京は経度が日本より西にあるが、同時刻を使っている。その為、夜の８時でもまだ明るい。成都への国内便が夜遅く飛ぶので、天安門通りを散歩する。男性は、はだかが多い。セミが鳴く。ズージャージャージャー。鳴き声が日本のと違う。大きな太陽が人民大会堂の影に入ろうとしている。23時55分発の中国民航に乗る。２時30分に成都着。夜中に飛ぶなんてビックリしたなあ。

成都飯店に泊る。りっぱなホテル。だけど風呂場のタイルがはがれていてどこかアンバランス。ホテル前も人、人、人でいっぱい。女性の服装は日本と変らない。成都の人口は500万人。大きな都市だ。車が少なく、人々は自転車に乗っている。信号が無いので、車は人の間を抜って走る。今日は成都にデポしていた装備の梱包と食糧の買い出しに行った。道路に山のようにスイカが積まれて売っている。ラクビーボールのような形、切ったのも売っている。スイカを食べながら歩いている人も多い。

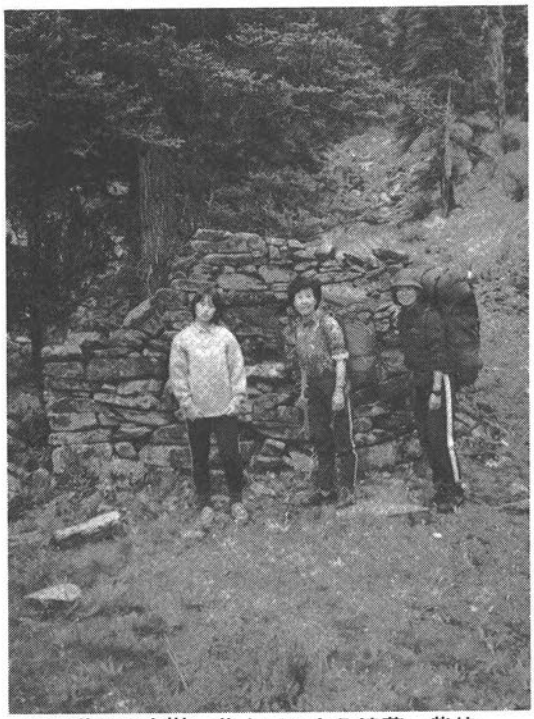
自由市場と政府の市場で買物をする。品物は豊富で、特に自由市場は活気があった。自由市場は場所代を役所に払って、品物は自由に売るとか。インゲン、キャベツ、トマト、玉ねぎ、なす、冬瓜、赤大根を買う。官製の方では缶詰類、乳製品、香辛料を、今日から四川登山協会の王さん、通訳の胡さん、コックの朱さんの３名が私達と行動を共にすることになった。昼食を食べた。豪華な中華料理だった。

「わあ、すごい」

「（値代は）全部で100元ぐらいです。こんな料理は私達でも食べられないですよ」と胡さん。胡さんの本職は大学の教授で給料は90元とか。私達は毎日、こんな豪華な食事をする事になった。四川省は〝食の四川〟といわれる。家庭では、朝はおかゆか包頭、昼はうどん、夜はスープの他に四品おかずがつく。給料の80％～90％を食べてしまうという。

ジープで４日間の旅

成都から車の旅が始まった。康定迄370㎞。13時間走って、チベット族の多い康定に着いた。農村地帯を通ってきた、畑には山の上迄、トウモロコシが植っている。ナス、枝豆は日本と同じ。どこに行っても町に並木がある。その為、町の印象深みのあるものにしている。工場のトイレに寄る。



▲見送りの真樹、荷上げに向う遠藤、柴崎

「王さん、工場の勤務時間は何時ですか。」

「8時から12時です。そして、2時半迄休みます。そして6時迄です。」

宣水河という激しい流水の河が、集落のそばを流れている。落ちたら助かりそうもない。中国の人に聞いたら、やはり落ちて死ぬ人が多いとか。流れが早く、水量が多いのは山に木が少ないせいかしら。

7月28日、康定から更に西に向う。チベット高原のゆるやかな起伏の中を走る、ヤク、羊、牛が放牧されている。4,500 m の峠にも。川のそばに石造りのチベット族の家が建っている。カラフルな髪かざりをつけ、黒い長いスカートをはいた女性がきれい。途中でマツタケを売っていた。4 kgで450円。雅江で調理してもらう。マツタケ炒めを沢山食べた。あー、今でもヨダレが出る。チベット族は親しみやすい。おばさんが車に寄ってきて、私のメガネと自分の首飾りを取りかえてくれという。メガネが飾りに見えたらしい。これは断った。雅江は、中国側の都合により宿泊出来ないとの事だったが、何とか泊れることになったが、写真もダメ、町にも出ないことになる。

7月29日、雅江から理塘に向う。公路が洪水の為切断されたので、北回りで理塘に向う。おかげで外国人が初めて入った土地を通った。得した一。しかもその道が花道なのであった。4,000 m の山腹にヤナギラシの群生が赤い。針葉樹林帯の中を走る。3,200 m の道端のよもぎ(?)に沢山のセミが止まっていた。大麦、ソバ、ジャガイモ、ソラマメが植っている。理塘は昔から町の奪い合いをされた所らしい。草原の中の素適な町だった。

7月30日、ジープの最後の日。理塘から熱柯に向う。途中、4,600 m の峠でゲニ峰の下の方が見える。道路は悪く、ガタピシゆられて疲れてしまった。昨日引き初めた小カゼが続いて、鼻声、寒気がする。

熱柯は谷合の小さな集落。電気は無い。地区の区長さんも民族服を着たチベット族。荷物の荷降しを町の人が手伝ってくれる。私達の到着を総出で見ていた。

▲〝別天地〟の草原。後方左にゲニ峰、約 4,100 m

今日から隊付コックさんが料理を作る自炊になる。夕食後、洗い物をしていると、子供達がとんで来て、ビールの空缶を持っていった。金物がめずらしい。中国語（漢語）がここでは通じない。

7月31日。午前中、熱柯から4,050ｍの峠迄歩き、高所順応に向う。峠から明日からのキャラバンのコースが見える。右下に部落、左前方に部落が見える。道は花の群生でゆるやかな草原が続いている。ゆっくり歩いて高所順応を行なったので下りは息苦しさはなくなった。夜、鼻水治る。

キャラバンが始まる

8月1日、朝9時過ぎ、キャラバンに出発する。キャラバンはチベット族の馬方とヤクと馬と一緒に進む。まるで西部劇のよう。昨日の4,050ｍの峠を越える。ジグザクの道を川に下る。その時、ヤクの一頭が暴走をして、荷を振りすててしまった。皆で、ころがったジャガイモを探す。川沿いの格則部落で昼食。黄色い花畑に囲まれた部落。7人しかいない。

ここから先は外国人は初めて。黄色い花畑が延々と続く。一登りして3,800ｍの平らな草原に出た。池もある。四方は、氷河の後を残す山々がそびえたつ素晴らしい所、西の端にゲニ峰が。この世のものとも思えない素晴らしさだった。

「隊長、今迄にこういう所が有りましたか？」

「見たことないね」

「九回の遠征でもですか」

「そうよ」

翌日、ＢＣ決定の為に先行した隊長から無線が入った。

「エー／、とても素晴らしい景色です。もう山に登らなくとも良い気分になってきまーす。」

クライマーの隊長の言葉に感動してしまった。下った川沿にもチベット族の部落があった。橋のそばに住民が現れた。初めて見る外人だったのかしら。素足の子もいる。南にまわって南達に着く。18時20分。長い行程だった。集落はない。草原の中にテントを張って寝る。目の前にゲニ峰がどっしりした姿を見せている。氷河がある。山腹も氷河に削られた後がえぐられている。

8月2日。ＢＣ地を探す為、先発隊が出発する。遅れて南達を出発する。緩やかな尾根を登る。一端湿原に下りて、ゲニに続く尾根の末端にＢＣ地が決った。4,200ｍの所だ。20人用の大きなテントを中心に8張のテントを張る。安全祈願をする。馬方の中にラマ教のお坊さんがいて、お教をあげていただく。昼間は太陽が頭の真上から差す熱さ。夜はヒョーが降り5℃迄下った。

（登山活動は別項参照）

帰 路

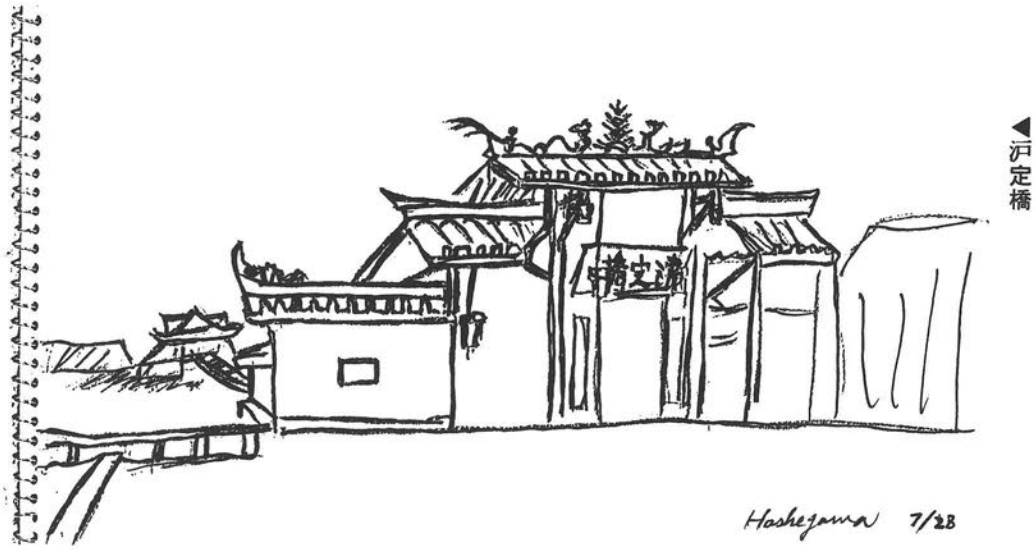
ＢＣを撤収する

8月14日、ＢＣを撤収し9時30分にＢＣを後に出発する。雨の降る19時30分に熱柯に到着する。真樹ちゃんは強い。ザックを最後迄しょっていた。15日、久し振りの晴。ぬれたテントや装備を乾かす。うれしくなって大量の洗たく、やりすぎて気分が悪くなってしまった。夜、村の人達が交換会を開いて下さる。チベットの歌と踊りを一緒に踊った。16日は自由行動日。馬方を雇って林Drと峠の上部4,500ｍのガレ場に登っていった。馬2頭と馬方一人で70元だった。蝶のバルナシウスが飛ぶ。インペラトールが大きな羽根を開げて、なんと優雅に飛んでいたことか。低いかん木に小さなセミが鳴いている。4,500ｍのセミはめずらしい。他のメンバーは峠でゲニの山頂が現われるのを待っていたという。とうとう頂上は見えなかった。

8月17日、雨の熱柯を出発する。山道の所々がぬかるんで荷を積んだトラックがはまってしまう。ロープをつないでジープが引き上げる。チベット草原を走る。花畑が色あせて、夏の過ぎゆくのがわかる。14時半、理塘に着く。皆で近くの温泉に行く。温泉は日本の東北の共同湯のようだった。温泉に入れて、久し振りに日本式の湯につかれた。温った。

温泉から出た後に、ラマ教の宮殿を見学に行く。町を見おろす高台にあった。宮殿の内は色彩がとてもきれいだった。文革の時にこわされ、今も作り直しているところだった。

8月18日、前日食べすぎて胃が炎症を起す。「初めて具合が悪くなった」、と他のメンバーに笑われる。私は、他の人が馴れない食事や疲れで下痢をしたり、高山病が出ても、体の具合が悪く



◀沪定橋

なることも無かったので、

「チベットに住める」

「瞬発力は無いけれど、持久力はある」とほめられていた。

理塘から康定へ。切断されていた道路は開通し、修理が続いていた。本当の手仕事だ。4,500ｍの峠を３回越える。ミニヤ・コンカが見える。康定に着く。町を見学する。映画館の前に沢山の人だかり。古いポピュラーソングがボリュームいっぱい流れていた。

８月19日。康定から雅安に。沪定橋でお昼。大渡河が流れている。紅軍記念碑を見学する。ここは、紅軍と習介石軍と激しい闘いがあった所。敵軍に橋を壊された紅軍は、クサリを伝って犠牲者を出しながら河を渡り、進んだのだった。途中、トウモロコシが茶色く枯れている。ここにも夏の終りがある。18時30分雅安に着く。雅安は山と川の有る落ち着いた町だ。

今日は小沢隊員の誕生日。中国側からお祝いのケーキが贈られる。鯉の丸揚げのごちそうでお祝い。

８月20日、ホテル脇の川に沿って、朝早くから人々が椅子に腰をかけ、お茶を飲んでいる。雅安から成都に向う。のどかな田園風景の中を走る。林があって川にアヒルが泳いでいる。昼頃、成都に着く。錦江飯店に泊まる。一流のホテルで日本だったらとても泊れないところ。胡さんが「ここの泊り賃は100元位ですよ」。胡先生の給料が90元だから・・・。ホテルのお風呂はきれいだった。

午後、装備のデポ品を四川省登山協会の倉庫に戻す。これで明日は、一日観光ができる。

８月21日、ホテルから車の渋滞の中を動物園に向う。パンダを見る。15頭位いるらしい。屋外にパンダはいた。汚れたパンダもいいね。特産品の工場か名所旧跡を案内してもらう。おみやげも買った。夜は四川省登山協会への返礼レセプションを隊が開く。歌を沢山歌う。ホテル前の路上に、掛軸が並んで売られている。林Drが値切るのがおもしろい。中国人は人民券を使っている。外人は、兌換券を使う。兌換券は輸出用の良い品物が手に入るらしく、中国人は欲しがる。ホテルの前には、兌換券を人民券と取り替えてくれと寄って来る。

８月22日、暗いうちにホテルを出、成都空港に向う。中国側の３名ともお別れだ。昼前に北京に着く。午後は買い物、前門にある絹の生地屋に行く。絹一着分が40元。

夕食は、中国登山協会が招待して下さる。おいしかった。

８月23日、いよいよ帰る日だ。午前中、故宮見学をする。清朝時代の壮大な建物だ。大きな建物の門を何回もくぐる。最後に西大后の寝室のある室にたどり着く。白いベットは今も生々しかった。私蔵した宝石も公開されている。清朝の権力がうかがい知れる。14時30分、空港を発つ。

中国の滞在は終った。18時すぎ成田についた。

登山行動

飛田和夫

未踏のゲニ峰のルートとして、東南稜（下部はガラ場？。5,000ｍ付近よりは２～３ケ所のギャラをもつ雪稜とナイフリッジ、その間に２ケ所程の岩稜によって形成）、南稜と命名したルートは、偵察の写真からわずかに見られるだけだが、下・中間部は岩稜で上部にいたって緩かな雪稜にうかがえた。

東南稜、又は、南稜のいずれかのルートにするか、そのルートに適したＢＣを決定する為に、８月２日に飛田・伊藤・山崎と案内人の馬方の４名は南達のキャンプサイトを先行した。

5,000ｍ付近より上部は黒く厚い雲におおわれている。草原の丘陵を越すと神秘的にたたずむ草原帯が横たわっていた。草原帯は１本の水流が流れ付近は地塘になっており対岸のＢＣ予定地までは渡渉となる。

ルートについては、昨夕の南達で、東南稜を望む事が出来、近づく程に弱点をみいだす事が出来ていたが、もう一本のルート・南稜を偵察に上流に入るが、地塘、ブッシュ帯、ガラ場における落石とブロックの崩壊、さらにＣ１予定地上部での荷上の問題等を考慮し、東南稜に決定する。

南稜の右手にガスの間に間にスッパリと切り立つ岩峰が印象的、この付近の地形をものがたっていた。1984年に中国・雲南省の玉竜雪山に行ったが、南北に走る横断山脈の一部であるゲニ峰も、同様の様な山容になるのだろうか。

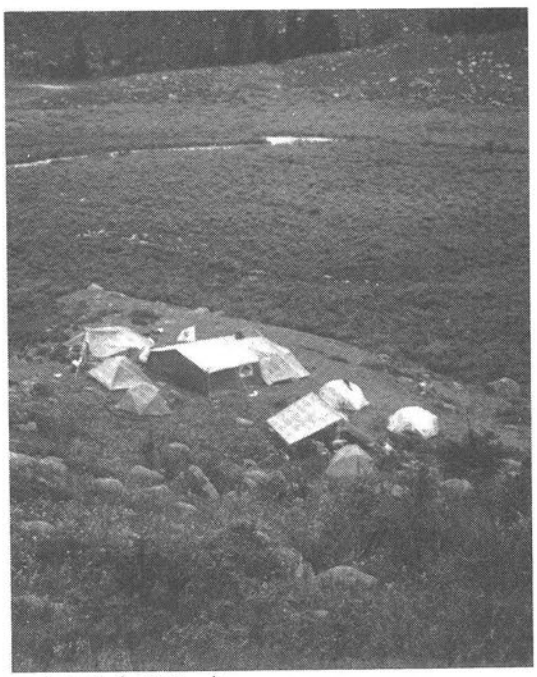
ＢＣ予定地に戻り本隊を迎え、ＢＣの設営、安全祈願の後に、登山に関して打合せをし、チームの構成を発表する。

Ａ隊、（Ｌ）飛田、伊藤、山崎
Ｂ隊、（Ｌ）永尾、小原、小沢
Ｃ隊、（Ｌ）遠藤、柴崎、長谷川、安田

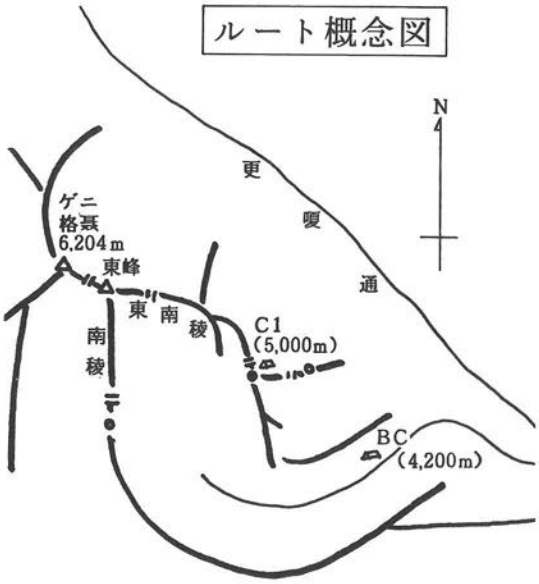
８月３日、Ａ隊は全員に見送られルート工作へ出発。丘陵の草原、樹林帯、草付の下部を抜けて登って行くと、上部は完全な岩、岩、岩の世界に入る。途中、一本の老木が時の流れを見つめるがごとく立ち、初めて対面したであろう外国人の私達に何かを語りかけているようだった。中間部に１本の沢が流れていた。上部は見渡す限りのガラ場なので反対側は上部からの雪面が横たわっているのだろう。ＢＣからも望めた双子峰の岩峰から右手に伸びる岩稜の最底コル目指し右上するが、所々、自分の意志とは別に、勝手に動き、何度となくスネを痛めつけられ、うずくまる時間が長くなる。が、所々に顔を出す青いケシの花が痛みをいやし、気分をいやしてくれる。

コルから上部は、傾斜も緩み意外と広くなるが、何とも積み重なる岩、岩には疲労が増し、さらに濃いガスに歩みを止められてしまう。

全体の感じから、Ｃ１予定地と思われる付近で、BCから同行してきた犬のコロ（私達がコロと名付け、何度となくコロと呼んでいるうちにすっかりコロになりきっていた）と昼食をしていると、ガスが切れだし、一段下った所に湖水が表われてきた。左に縦に顕著な節理の入る双子峰の岩壁、右手にはガレ岩の上に懸垂氷河の末端が横たわっている。その中間となるコルには岩稜が横たわり、黒く汚れた雪面が見える。コルの下には１本の流れが見える緩かな岩壁が形成、その下部は丁度左右からの落石が集まる沢になっていた。その付近から一条の流れが段差をもって湖水に注いでいる。一連



▲ＢＣ（4,200m）



を見渡すと完全な野外音楽場の様だ。どこに目を転じても、岩、岩、岩の殺風景で、心をいやす場所であろうはずがない。

付近を偵察後に、湖水から一段上った所をＣ１にする事にし、帰路、ケルンの数を増してＢＣへ帰幕した。一応Ｃ１上部へのルートも確認出来、幸先のよいスタートになった。Ｂ・Ｃ隊はＢＣの補充と隊荷の整理をする。

ＢＣ（4,200ｍ、８時出発）～Ｃ１予定地（約5,000ｍ、11時30分）

８月４日、Ａ隊はＣ１への荷上げと上部のルート確保。Ｂ・Ｃ隊は順応を主体とした荷上げ。ケルンと標識布の補給をしながらＣ１に入る。テントサイトの整地をしていると順次隊員が上って来る。一歩一歩が自分の最高高度の獲得。

Ｃ１上部へはガスの為に行動出来なかったが、わずかの時間に上部へ、ガレ沢のどんづまりまで達すると右上する棚が確認出来た。問題は左右からの落石、右手のブロック。

ＢＣに下降すると伊藤が風邪の為に38.2℃の熱との事、Ａ隊からＢ隊へ、小原をＡ隊に変更する。

８月５日、悪天候が続き、何となく気分が沈むが、サー・イクゾーと！

遠藤、柴崎をトップに行動開始し、順次ＢＣから荷上げに出る。江尻、林、娘の真樹と中国側３名に見送られて、Ａ隊の３名はＢＣからＣ１に移動した。またしてもＣ１で濃いガスの為に足止めをさせられてしまう。が、わずかに回復と同時に、とにかくコルまでのルート工作に出発する。岩、岩と重なる沢をつめ前日の地点に達し、ガラガラとした右上する棚を登るが、頭上には懸垂氷河の末端が不気味に横たわっている。途中から段差のもつバンドに入るとホットする。コルに達し、傾斜の落ちた岩稜を右上すると、Ｃ１を出発して唯一安全で気の休まる所になる。意外と早く雪面に出た手持ちのフィックス２Ｐを雪面に伸ばすが、黒い雪の下は氷。スノーバーは利かず。

Ｃ１に下降した直後、16時頃より急に強雨。Ｂ・Ｃ隊は荷上をすませ、ＢＣへ下降した。

８月６日、雨は降り続く。落石もそうだが、懸垂氷河の崩壊も頭からはなれない。７時の定時交信でＣ１へ移動してくるＢ隊にテントを安全と思われる湖水付近に移動する様に依頼する。朝食をしていると落石の轟が全体をおおう。ボンヤリと見えるのだが岩雪崩が発生している。しかもルート上だ。連日の降雨によってバランスが崩れているのだろう。そうなると一層現在のキャンプサイトさえ不安になってしまう人間の弱さがある。間断なく続く落石の為にルート工作は無理なので、テントの移動をする。

Ｂ隊の永尾、伊藤はＣ１へ。小沢は不調で途中からＢＣへ下降、Ｃ隊の遠藤、柴崎は休養、長谷

▲第１キャンプ（Ｃ１）付近

▲キャラバン初日。南達手前から望めたゲニ峰。
偵察の写真(東面)から見る遠景とはだいぶ様相が違っていた。東南稜も以外と時間がかかりそうだ。

川、安田が荷上げを行なう。

8月7日、昨夜からの雨は7時の交信時にミゾレ、すぐに雪に変った。A・B隊の5名でルート工作に出る。すでにルート上は白く雰囲気が違ってくる。右上する棚は落石とブロック崩壊の為に荷上ルートとしては不都合となるので、岩壁にフィックス工作を小原、山崎に頼み、飛田、永尾、伊藤は前回のルートから最高到達点へ。4P伸ばすと完全なホワイト・アウトになってしまう。下部から生温たかいような微風が顔をなで、付近は何も見えず、何となく踏み込んではいけない場所に入ってしまった様な薄気味悪くなる。回復もしないので下降する。次第に風が伴なってきた。

この間、BCは私達の行動を危具し、10時30分頃よりBCからC1に向けて2人を緊急行動をさせていた。7時の定時交信後、悪天により行動についてコンタクトする為に8時に再度する事にしていたが、9時も10時も交信がつかずに、やっと12時に交信できた。昨日の岩雪崩と連日の悪天気はBCにいた隊員にも計り知れない心苦となっていた。

単身吹雪の中をC1に急下降し、途中までC1に上って来る長谷川、小沢を迎えた。しばし休息の後、BCへ下降していった。

安堵したBCではギョウザ作りをしているとの事、明日はギョウザが食べられそうだ。

8月8日、今朝は霧雨で一面の濃いガス。ルート工作は不可能。水流は、又、ミルク・コーヒーの様に濁ってしまった、崩れているのだろう。昼頃になってポツポツと雨がくる。雨になるとわずかに視界が広がるので急拠出発。残された日程を考えるとどうしても今日はルートを伸ばさなければならない。が、結果は前日よりも悪く、私達の行為は実を結ばなかった。

C1に戻ると、C隊と小沢も上って来ており、テントの数も増えた。登山隊員10名が揃った。

〔ミィーティング〕

○現在のルートは、約5,300mまで

○タクティックスを再度見直しをしているが、残された日数を考えると、現段階でもアタックメンバーは1～2隊、他はサポート隊になる。

○その計画も明日から好天になった場合である。

だが、残された登山期間中に好天になる可能性は非常に薄い。と、いう事は未踏の頂に立つ可能性は薄い。まだ隊員に言うべき事ではないかも知れないが、やはり現状を把握してもらわざるを得ない。そして、今回ゲニに参加したメンバーを考えた時、ゲニに立つ可能性が薄いので、他のピーク（5,000ｍ位のピーク）に転進してはどうか、と、隊長の私から提案をする。

種々、話しが出され、他のピークでも立ってみたい。他の地域も歩いてみたい。とにかくゲニだけで計画を進めたい。出来る事なら隊長だけでも立ってもらいたい。等々出されたが、最終決定は隊長が下す事にした。

私自身は、日本ヒマラヤ協会は長年に亘り、国際交流による地道な活動を築き上げる事により、中国でも数峰の未踏峰の許可をいただいている。今回のゲニ峰も同様にして星霜を重ねての許可であり、さらに、私自身にとっても、新たな転機でのスタートとして取組んできたので、隊員のゲニで遂行したいという新たな意志のもとに残された知い期間であるが全力を注ぐことにした。明日の行動は、ルート工作隊と順応行動隊で時間のゆるす限り上部に達し、全員ＢＣへ下降。翌日の休養をはさみアタック開始とする計画を立てた。

▲雪面１Ｐのルート工作

だが、〝神の山・ゲニ〟は、私達の新たな意欲を全て消滅させてしまう結果が生まれてしまう。

８月９日、昨夜は久し振りの雨音を聞かずにすんだが、朝、テントから出ようとすると重い、何と雪が降り続いていた（７時、17cm、ＲＣでは５cm）。濃いガスも漂い、本日の行動が不可能になってしまった現在では、残りの登山日数から考えても、アタックを断念せねばならなくなってしまった。自分自身でもわかる程に過激な考えを押えての判断を下さなければならなかった。又、直感で、この降雪は何日か続くようにも思えた。ゲニ峰に最後のとどめをされてしまった。

Ｃ１を撤収してＢＣへ下降する。

９月10日、休養

９月11日、雪の降り続く中を、飛田、永尾、小原、長谷川、伊藤でＣ１にキャンプサイトの整理と荷下げに行って来る。Ｃ１付近の積雪は約55cm。双子峰の岩峰からは、ひっきりなしに雪崩が落ちていた。

ＢＣに休養した翌日からでも好天になれば、アタックしようと過激？な考えをもち、タクティックスも検討していたのだったが、すべてが白い雪の中にかき消されていった。これで良かったのだろうか。

▲最高到達地点となってしまった約5,300m

格聂峰敗退記

山　﨑　賢二郎

南達から見上げた格聂峰は、遠景とはうって変って荒々しい表情を見せていた。

Ｃ１予定地の5,000ｍ付近には巨大な城塞のように懸垂氷河が立ちはだかり、その上部は雲の中に消え入っていた。想っていたよりもずっと困難な様相に、果たして、頂に立てるだろうかという不安が心をよぎった。しかし、この山を真近からこのように比較的はっきりと望め得たのは、これが最後で、しかも下半部のみであった。16日間のキャラバンも含めた登山期間中、１度もその山頂を見ることすらもできなかった。

実際の登山活動は、連日降り続く雨と雪の中で思ったように進まない。５日間滞在したＣ１のテントの中では、ルート工作に上っていた３人が毎朝眠を覚すごとに溜め息をもらし、神経は段々とピリピリと音をあげてくる。それでも、まだあと幾日残っていると互いに心を安げようと冗談を飛ばしたりもするが、天気は次第に悪化してくるばかりである。少しでも晴れ間があれば良いのだが、ひっきりなしに雨と雪が降り続く。最後には雨によってわずかに視界が広がった中を、ルート工作に出発したが２回とも全く視界を得ることができず成果をみることができなかった。おまけに全身ずぶ濡れになった。テントの外では、毎日岩崩れの音が響いていた。

▲天気回復を待つ（山﨑・伊藤）

この登山は、私にとって初めてのヒマラヤであり、次への想いも含めて、重大なものであったのだが残念乍ら、登頂を果せずに終ってしまった。しかし乍ら、この登山全体が失敗であったとは思わない。同行された連絡官の王先生、通訳の胡先生、そして、コックの朱先生らとは非常に楽しく過させていただき大変お世話になった。又、運転手の方々の尽力にも感謝しなければならない。さらに、中国登山協会の方には、格聂への路々お世話になり、この登山の敗退に対しても格別の御配慮をいただいた。

色々なものを学ぶことのできた１ケ月間であったと思う。これらの多くの方々に心から感謝いたします。もし、又、可能であればもう１度中国を訪れ、格聂峰に、そして多くの山々にも挑戦してみたい。

ありがとう、ゲニ

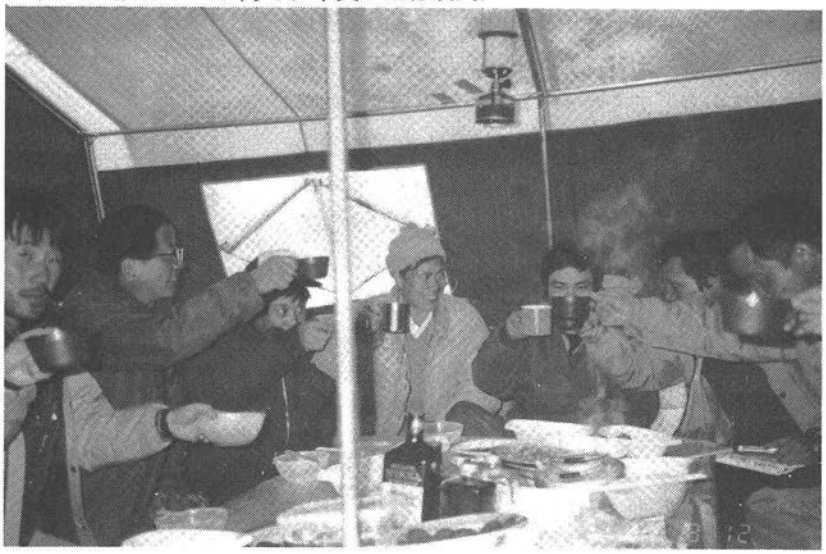
（通訳）胡　　徳　友

私は四川大学日本科の教師です。今年の夏休み、おかげさまで日本ヒマラヤ協会ゲニ峰登山隊の通訳として、連絡官の王馬特さんとコックさんの朱毅平さんとともに、飛田和夫隊長さんを始め、13人の日本の方々と約１カ月間を過ごすことができました。１カ月と言えば短いですが、しかし、この１カ月での経験は一生忘れがたいもので、13人の日本の方々は一生忘れがたい人たちです。

少年時代から丘陵地帯を離れて、ずっと単調な成都平野で20余年を過ごしてきた私は、山が好きで、一度でもいいから、どうしても高原と山間地帯へ行ってみたいと願っていました。ですから、私にとっては、今度与えてくださったこのチャンスは願ってもないものでした。

映画やテレビでしか見られなかったチベット族の牧畜民のテントや、牛、やく、馬、ひつじの群れなどが点在し、花の海のように美しくて果てない草原と、子供時代に「康定情歌」という歌で知っていた有名な「跑馬山」とを見ることができた

▼BC（メステント内で、中央が胡徳友氏）



時、「二郎山を歌う」という歌に「高万丈」と歌っている「二郎山」を車で実際に越えていた時、夢でも見た、赤軍の英雄たちが命をかけて敵軍の手から奪い取った泸淀橋をバックにして写真を撮った時に、これから成都平野に閉じこめられて一生終えても遺憾ないと思うほど感慨無量でした。特に、広々とした高原平野の、色とりどりの花一面の草地にある湖の傍に立って見えた太陽に輝いていて、聳え立っているゲニ峰を始めとする六つの5,000ｍ以上の雪山が、なおさら忘れがたい存在です。

７、８月と言えば、成都では最も暑い時期なのに、ゲニ峰の海抜4,000ｍもあるふもとでの半カ月ぐらいのテント生活は、ほとんど成都の人びとが憧がれている大雪が降っていた冬の生活でした。そうかと思うと、短いですが、顔の皮までむけるほど日が強かったり、大雨や雹まで降ってきた真夏、小雨がしとしとと降りつづいた涼しい秋のような気候も体験もしました。そのため、わたしたちテントに残るものの活動範囲は、死刑にされた犯人の牢房よりも窄いとコックさんの朱さんがよく冗談するほどの２・３㎡ぐらいでした。しかも、立てばテントが低いので背一杯伸びることができませんし、座ろうとすれば、水一杯溜っているのでろくに座れません。しかし、その時、中国、日本もしくは、全世界の都会の人のうちでも、わたしたちしかこんな体験をすることができないかも知れないと思うと、むしろ自慢に思っていました。少なくとも私にとっては、一生またとない体験であるかも知れません。

ところが、「人は心の通う友人に逢うと千杯飲んでも少ないと思い、話が合わないと半句言っても多すぎると思う」というように、もし、一生忘れがたい立派な人間と一緒でなかったら、どんなに憧がれて、美しい所に来ても、以上のような感慨がどうしても湧いてこないでしょう。

今回、おともさせていただいた日本の13人の方々が立派な方々ばかりであるだけに、彼たちによって出来たゲニ峰登山隊は、日本各地から集まってきた、もともと知り合いでなかった団体だとは思えず、むしろ、一つの睦じく幸わせな大家庭のように思われます。この幸わせな家庭のメンバーとしての一人びとりの顔は、いつまでも私の顔に消えないでしょう。

その旦那様に嫉妬心を起こすぐらい、賢くて、皆の食事のために毎日忙しがっている美人の柴崎さん、食事まで忘れてしまうほど、山の好きな女性の豪傑と私たちに称されている遠藤さん、ほかの子供でしたら、まだお母さんのふところであまえるだろうに、皆に負けないように頑張り通した隊長さんの14才のお嬢さんの真樹ちゃん、男らしくて、どこか中国の男性の性質によく似ている体の大きい小沢君、兄弟のために自分のすきな事業まで犠牲にした眼鏡をかけている美男子の山崎君、会食でお酒を飲むと、中国の朱さんと一緒に騒ぎ出して愉快な雰囲気を作り出し、いたずらずきですが、聡明で、前歯一つ抜けた伊藤君、まだ若いのに、ひげが濃いだけに皆におじさんと呼ばれ、隊長さんをお父さん、お父さんと大声で、したしそうに呼んで冗談していた小原君、学生のために、高原の花の写真を夢中に撮り、皆の栄養のために精一杯していた、おだやかな性格の持ちぬしの安田君、学校の先生ではありますが、踊り出すと先生か学生か見当のつかないぐらい、きっと生徒に

すかれているに違いない長谷川君、三人の可愛い男の子のお父さんで、チベット族の馬方にまで親切に病気を直してくださった林君、無口で、慎重に見える副隊長の永尾君たちがお互いに助け合って、〝大家庭〟のために一生懸命働いているのに私たち中国の三人が感心させられました。そして、この家庭の〝家長〟に当るのは、迫力があり、決断力に富んでいる登山家の飛田隊長さんで、この〝家庭〟を完璧にさせたのは、いつも皆に楽しませたりしていた、おじいさんに当るやさしい江尻先生です。

冬の生活をしていた夏休み、忘れがたい体験、忘れがたい人たち、ありがとう、ゲニ！

一九八七年八月

▼中国側の３名、左より王・胡・朱の各氏

〔天気概要〕

1日 朝 曇 昼 にわか雨 夕 曇 夜 強雨（雷）	5日 朝 7時頃止む、ガス 昼 曇～雨～曇 （C1） 夕 一時青空、～雨（C1） 夜 雨 （C1）	9日 朝 雪 （C1） 昼 雪 夕 雨 （BC） 夜 雨
2日 朝 曇 昼 曇～雨～曇 夕 曇～雨～曇 夜 強雨（雷）	6日 朝 雨 （C1） 昼 雨 （C1） 夕 曇 （C1） 夜 雨 （C1）	10日 朝 曇～雨 昼 雨～雪 夕 雪 夜 雪
3日 朝 雨続く、アラレ （BC）昼 曇（展望有り） 夕 曇 夜 強雨（雷）	7日 朝 雨 （C1） 昼 雪 （C1） 夕 雨 （C1） 夜 雨 （C1）	11日 朝 雪 昼 雪 （C1） 夕 雨 夜 雨
4日 朝 雨続く （BC） 昼 曇～雨 夕 雨 （BC） 夜 雨（雷鳴らなくなる）	8日 朝 霧雨、ガス 昼 霧雨、ガス 夕 雨 夜 雪	12日 朝 雨 昼 雨 夕 雨～曇 夜 雨

登山隊員募集

―ゲニ峰（6,204m）・未踏峰―

今夏、悪天候に阻まれて断念となりましたゲニ峰（四川省海子山塊）へ、明月、再度、登山隊を派遣する事になりました。

本年度の失敗を教訓にし、時期の変更、ルートの再検討等を重ね、再度万全の体制で挑みます。

時　　期　1988年５月～６月（約45日間）
募集人員　６名
負 担 金　70万
資　　格　冬山経験４年以上のＨＡＪ会員。会員外の希望者は別途協議致します。
申込み先　ＨＡＪ事務局まで
〆 切 り　定員になり次第〆切ります。

地域ニュース

《ネパール》

ガウリサンカール登山禁止

ネパール観光省では、ロールワリン山群の盟主ガウリサンカール（7,134m）を今秋から登山禁止にすると発表した。

登山禁止の理由、期間などの詳細は不明。

同峰とマンルン・チューを挟んで対峙するメンルンツェ（7,181m）は、今春から中国でオープンとなっている。

秋のヒマラヤ登山隊

ネパール観光省の発表によると、このポスト・モンスーン期にネパール・ヒマラヤを訪れる登山隊は、17ケ国から55隊で、32の高峰に挑む。

国別では、フランス隊の11隊が最も多く、ついでアメリカの7隊、スペインの6隊、日本、オーストリア、スイスの各5隊が続き、さらにイギリスの4隊、オーストラリア、イタリアの各2隊で、その他、ブルガリア、ベルギー、韓国、オランダ、ニュージーランド、ポーランド、西ドイツ、ユーゴスラビアが各1隊となっている。

この秋の日本隊は以下の通り。

○ダウラギリⅠ峰（8,167m）

福岡登山研究会ダウラギリⅠ峰登山隊（三苫達久隊長ら5名）は、北東稜に挑む。

○アンナプルナⅡ峰（7,937m）

岡山アンナプルナⅡ峰南西壁登山隊（近藤国彦隊長ら2名）は、南西壁に挑む。

○マナスル（8,163m）

青森県山岳連盟マナスル登山隊（松島静吾隊長ら14名）は、1985年に断念した東稜に再戦する。

○ガネッシュⅤ峰（6,986m）

福井山岳会ネパールヒマラヤ登山隊（牧野治生隊長ら8名）は、南稜に挑む。

○プモリ（7,161m）

境町山の会プモリ峰登山隊（大橋良雄隊長ら9名）は、南稜に挑む。

《パキスタン》

K2で東洋大隊遭難

今夏、K2（8,611m）の南東稜に挑んだ東洋大・パキスタン山岳会合同登山隊（大滝憲司郎隊長ら19名、日本側隊員12名）は、8月24日に鈴木章登攀隊長（32）、斎藤文秀隊員（31）、パキスタンのシェア・カーン副隊長（33）の3名が頂上アタックに向い、約8,350mの地点まで達したが、強風のため登頂を断念。下山中、8,100m地点で鈴木登攀隊長が転落、死亡した。遺体は9月4日、ヘリコプターでベースキャンプに収容され、荼毗に付された。

今年、K2には東洋大の他、高山研隊（遠藤晴行隊長、南東稜）、スイス隊（Erhard Loretan隊長、南壁）、フランス隊（Rolland Martine隊長、南東稜）、アメリカ隊（James Wickwire隊長、南稜）、スペイン隊（Alberto Posade Alonso隊長、南壁）の6隊が挑んだがいずれも悪天候のため断念している。

《インド》

HAJ女性隊、ヌン登頂

今夏、カシミールの盟主、ヌン峰（7,135m）に挑んでいたHAJ女子ヒマラヤ登山隊（木下祥子隊長ら5名）は、8月27日に西稜からの登頂に成功した。

同隊は、7月26日に日本を出発してデリーに向った。デリーでの出発準備を終えた後、空路スリナガールへと飛び、スリナガールからは車でカルギル経由でタンゴール村へと入った。

8月4日にB・C（4,100m）を建設して登山活動を開始した。5日にC・1（4,800m）、8日にC・2（5,300m）、19日にC・3（5,800m）、24日にC・4（6,300m）と順調にキャンプを展開した後、27日に小泉恵子副隊長（33）、貝塚珠樹隊員（26）、高所ポーターの3名がC・4から頂上アタックに向い、12時25分に登頂に成功した。

（登山隊の報告は次号に掲載致します。）

《中　国》

チョモランマで防衛大隊遭難

チョモランマ（8,848m）の西稜に挑んでいた防衛大学山岳会隊（有馬元治総隊長、川上隆隊長ら30名）の横山正夫登攀隊長（44）が、9月2日C1からBCに向けて下降中、東ロンブク氷河の高度5,500m付近で渡渉する際に転倒、死亡した。横山登攀隊長は単独でC1からBCに下ったが、到着予定時刻になっても帰着しなかったため、捜索を開始したところ、翌3日午前、遺体となって発見された。

同隊は、7月15日に成田を出発、8月5日にBC（5,150m）を建設した後、C・1、C・2とキャンプをのばしていた。

尚、同登山隊は福楽勣（39）氏が登攀隊長として指揮をとり9月16日より登山活動を再開した。

《ブータン》

スノーマン・トレック禁止

ブータン観光省は、此の程、ブータンの観光規制を発表した。

ブータン政府の公報「クエンセル」に依ると、ブータンの最高峰、ガンケル・プンスム（7,541m）の登山と、ルナナ高地からニカチューへと踏破する「スノーマン・トレック」のトレッキングが本年度から無期限で禁止された。

また、来年からは、一部の僧院や聖地などには地元の巡礼者や参拝者以外は立ち入りが禁じられるとの事。

ガンケル・プンスムの登山禁止については、既に「ヒマラヤ」Vol.187で紹介した通りである。ガンケル・プンスムのアプローチ・ルートもスノーマン・トレックのトレッキング・ルートも共に高い峠を幾つも越えるなど地理的環境が極めて厳しく、これ迄もトランスポートなどにトラブルも相次いでいた。今回の禁止措置をみると、結局、新しい山やトレッキング・コースを開けてはみたもののリスクばかり大きく、西ブータンのジチュダケのようにはいかなかったと云う事であろうか。

トピックス

中根千枝氏に国際交流基金賞

我が国と諸外国との文化交流、相互理解に貢献した個人、団体の功績を顕彰するため「国際交流基金」（佐藤正二理事長）が制定している「国際交流基金賞」の本年度受賞者に9月11日、東大名誉教授で民族学振興会理事長の中根千枝さん(61)と米国コロンビア大教授ジェームズ・モーレイ氏（66）が決った。

中根さんはインド、チベット、日本の社会構造の比較研究を通じて国際学術交流に大きな役割を果たした。モーレイ氏は日本外交政治史の研究者として日米文化交流に貢献した。

授賞式は10月1日、都内のホテルで行なわれた。

中根さんは、1985年夏、HAJの派遣した日中婦人友好登山隊の総隊長として中国新疆・崑崙山脈の麓、和田まで同行された。

前柴田会長を囲む会

本会創立以来20年もの長い間に亘って会長を務められた柴田前会長夫妻を慰労する懇親会が、9月12日（土）～13日（日）にかけて御岳山の名古屋市民休暇村で行なわれた。

12日夜の懇親会では1960年代の外貨割当の厳しい時代にネパールの留学生を受け入れられた柴田氏の民間外交の苦労話しをはじめとし、数々の思い出を語り合いながら20年間の歩みを振り返えられた。また、思い出話しの中からHAJの目指すべき姿が熱く論じられるなど夜の更ける迄語りあわれた。

翌日は、有志4名が早朝、宿を出発して御岳山登山に向った。11時には田の原で再度合流し、その後、開田高原へドライブして、おいしい木曽の手打ちそばを御馳走になって散会となった。

参会者は以下の14名。柴田金之助・君江、増田秀穂、山田正弘、沖允人・道子、矢野郁雄、井関扶、徳島和男、橋本広、丸山寛子、内田嘉弘、清水澄、尾形好雄。（敬称略、順不同）

インフォメーション

都岳連・海外登山研究会

海外登山を目指す人達に人気の高い恒例の標記研究会が下記の通り開催されます。

記

日　時　11月14日（土）17時～15日（日）15時
場　所　国立オリンピック記念青少年総合センター（小田急線参宮橋駅下車徒歩５分）
参加費　6,000円（一泊三食付き、資料代）
定　員　100名
問い合わせ　東京都山岳連盟
〒-150　渋谷区神南1-1-1 岸記念体育館内

藤江幾太郎・チャリティ展

恒例となった藤江幾太郎画伯（ＨＡＪ前監事）のチャリティ展が下記の通り開催されます。

ネパールへ小さい善意を届けるため、「たたら同人展」のコーナーで色紙、スケッチ、ミニ油画、陶版画などが出品されます。

記

日　時　11月30日（月）～12月５日（土）
11時～19時（最終日は17時迄）
会　場　日本橋アートプラザ
東京都中央区日本橋2-1-13

地下鉄・日本橋駅下車２分。
ＪＲ東京駅・八重洲北口から５分

東京集会のお知らせ

10月の東京集会は、今夏、ヌン峰の登頂に成功したＨＡＪ女性隊の報告並びにスライド観賞を予定しておりますので多数ご参会下さい。

日　時　10月26日　午後７時～
場　所　ＨＡＪルーム

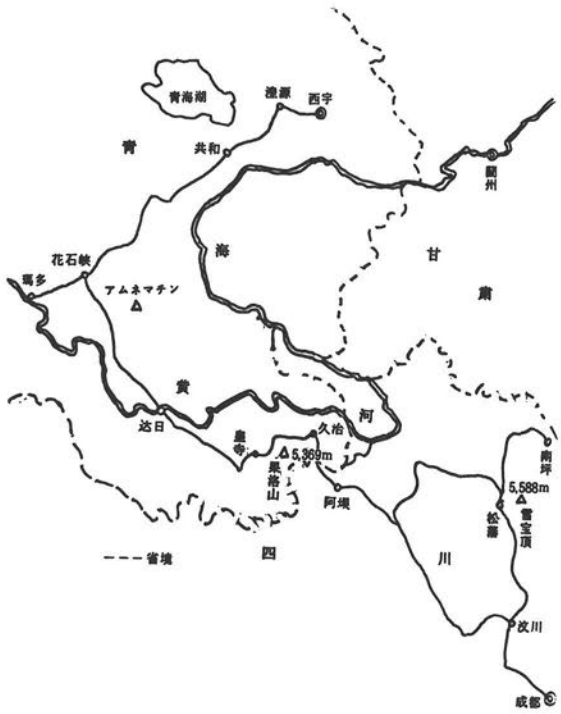
登山隊員募集

―果洛山（5,369ｍ）―未踏峰

星宿海から扎陵湖・鄂陵湖を経た黄河は、やがて松藩草地で大湾曲し、北西へ流れて行きます。流れを変えるやや南にひっそりと聳え立つのが、果洛山（別名・年保一日寨5,369ｍ）です。

青海省果洛チベット族自治州に属しますが、東はすぐに四川省アパチベット族自治州に接しています。

近くには、年保仙女湖などの名勝地があります。許可が降りれば、帰路は四川省成都へ下山する予定です。参加希望の方は、事務局までお申込み下さい。



記

1. 時　期　1988年７月24日～８月22日（30日間）
2. 人　員　10名
3. 負担金　65万円
4. 資　格　冬山経験３年以上のＨＡＪ会員（会員外の希望者は別途協議します。）
5. ✓切り　定員になり次第✓切ります。

インド・ヒマラヤ編(5)

外務省及び日本大使館への登山届け

インドの場合、登山許可取得に際しては、ネパールやパキスタンのように（社）日本山岳協会の推薦状の問題がないため、外務省及び日本大使館を通さず、登山隊が直接ＩＭＦへ登山申請して登山することができる。

然し、海外の山で遭難事故が起った場合、一番お世話になるのが在外日本大使館及び外務省領事課である。従ってインド・ヒマラヤへ出かける登山隊も出発前には必ず、外務省及びデリーの日本大使館へ登山届けを提出しておくべきである。

届け出に際しては、登山計画書、メンバー・リスト、現地及び日本国内の連絡先を明記した緊急時の連絡網、それに念書を添えて、遭難事故発生時における関係方面への連絡及び救助用ヘリコプターの出動に関する便宜供与依頼書（願い書）も合わせて提出しておくべきである。

（外務省提出書類）

(1)和文計画書　3部
(2)英文アプリケーション・コピー　3部
(3)願い書（関係諸機関に対する便宜供与依頼書）オリジナル　1部
　— 同コピー —　3部
(4)念書（登山隊に関する一切の責任を負う旨を誓約する念書）1部
　— 同コピー —　3部

（送付先）
〒100 東京都千代田区霞が関 2−2−1
外務大臣官房文化交流部長　宛
☎ 03-580-3311　内線 2873

（日本大使館送付書類）

(1)和文計画書　1部
(2)英文アプリケーション・コピー　1部
(3)英文メンバーリスト・コピー　1部
(4)願い書（遭難事故発生時における便宜供与依頼書）オリジナル　1部
　— 同コピー —　1部
(5)念書（登山隊に関する一切の責任を負う旨を誓約する念書）　1部
　— 同コピー —　1部
(6)外務省に提出した願い書及び念書のコピー　各1部

外務省宛願い書

日本ヒマラヤ協会　THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN
〒160 東京都新宿区高田馬場3−23−1 淀橋食糧ビル506号
電話 東京(03)367−8521
Ref. NO.
OFFICE : 506 YODOBASHISHOKURYO BLD. 3-23-1 TAKADANOBABA SHINJUKU-KU TOKYO JAPAN
PHONE : 03-367-8521　CABLE : HIMALAYALP
Date :

1987年7月6日

外務大臣官房文化交流部長　殿

日本ヒマラヤ協会
会長代行　遠藤

願　い　書

今般、本会は別添計画書のとおり、1987年7月にインド、カシミールヒマラヤのヌン峰へ登山隊を派遣することになりました。

付きましては、関係の諸機関に対しまして、下記により便宜供与方ご依頼致したく、ご高配賜りますようお願い申し上げます。

記

1．隊　名：日本ヒマラヤ協会女子ヒマラヤ登山隊1987年
2．目標の山：インド、カシミール・ヒマラヤ、ヌ　ン　峰(7,135m)
3．隊長名：木　下　祥　子(Kinoshita Sachiko)以下5名
4．登山期間：１９８７年７月２５日〜９月５日
5．ご依頼する内容：とくにありませんが、遭難発生等不測の事態が生じた場合などの際に、何分宜しくお願いします。

以上

（送付先）
Embassy of Japan
Plot No. 4 & 5-G
Chanakyapri,
12 Pretoria Street,
New Delhi, INDIA.

（注）在インド日本大使館特命全権大使の名前は必ず外務省などで確認すること。呉々も前任大使名で提出するような失礼はしない事。

入国通知

登山隊は、デリー到着の確実な月日が決ったら、ＩＭＦへ「入国通知」を送付しておく必要がある。この入国通知は、遅くともデリー到着の１ケ月前までには送付しておかなくてはならない。この連絡が遅れると、ＩＭＦでは登山隊がいつ来るのか判らないためにリエゾン・オフィサーの手配が遅れ、登山隊はデリーで無用な滞在を強いられることになりかねない。

入国通知に記載する事項としては、以下のような事が記載されていればよい。

①登山隊名②先発及び本隊のデリー到着日③デリーでの滞在先（宿泊先）④デリーでの連絡先（エージェントなど）⑤リエゾン・オフィサーとのブリーフィング希望日・場所⑥デリー出発日及びアプローチの日程。

家族会

隊長及び派遣留守本部の責任者は、登山隊の出発前に隊員とその家族代表者を混じえた家族会を招集すべきである。

自分の息子なり夫がどんな人と一緒に出かけるのか、出かける山はどんなところなのか、万が一事故が起った場合はどのように対処するのか、

外務省宛念書

日本ヒマラヤ協会　THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN
〒160 東京都新宿区高田馬場3－23－1 三峰会館ビル506号
電話 東京(03)367－8521
OFFICE: 506 YODOBASHISHOKURYO BLD. 3-23-1 TAKADANOBABA SHINJUKU-KU TOKYO JAPAN
PHONE: 03-367-8521 CABLE: HIMALAYALP
Ref. NO.　Date:

1987年7月6日

外務大臣官房文化交流部長　殿

日本ヒマラヤ協会
会長代行　遠藤　登
日本ヒマラヤ協会女子ヒマラヤ登山隊1987年
隊　長　木下祥子

念　書

今般、本会は別添計画書のとおり、１９８７年７月～９月にインド・ヒマラヤへ登山隊を派遣することになりました。

登山活動にあたりましては、此れまでの経験を十二分に生かし、細心の注意を払い、且つ充分な救助体制を持って遭難等の防止に全力を尽します。

尚、万一、不幸にして遭難等が発生した場合は、救援活動等に要した一切の経費は本隊において責任を持ってお支払い致しますと共に、事後措置につきましても万全を期するものとし、一切貴官にご迷惑をおかけしないことを誓約致します。

日本大使館宛願い書

Ref. NO.　Date:

1987年7月6日

在インド日本大使館
特命全権大使　野田英二郎　殿

日本ヒマラヤ協会
会長代行　遠藤
日本ヒマラヤ協会女子ヒマラヤ登山隊1987年
隊　長　木下祥子

願　い　書

今般、本会は別添計画書の通り、１９８７年７月～９月にインド・ヒマラヤへ登山隊を派遣することになりました。

付きましては、下記により便宜供与方ご依頼致したく、本省宛て文書写しを添えましてお願い申し上げます。

記

1．隊　名　日本ヒマラヤ協会女子ヒマラヤ登山隊１９８７年
2．隊長名　木下祥子(Sachiko Kinoshita)
3．隊員数　５名
4．遠征期間　１９８７年７月２６日～９月５日
5．目標の山　ジャム＆カシミール州、ヌン峰(7,135m)
6．ご依頼する内容　遭難発生時の緊急連絡・救援(ヘリコプター出動を含む)等についてのご協力。

以上

日本大使館宛念書

Ref. NO　　Date

1987年7月6日

在インド日本大使館
特命全権大使　野田英二郎　殿

日本ヒマラヤ協会
会長代行　遠藤
日本ヒマラヤ協会女子ヒマラヤ登山隊1987年
隊　長　木下祥子

念　　書

今般、本会は別添計画書のとおり、1987年7月～9月にインド・ヒマラヤへ登山隊を派遣することになりました。

登山活動にあたりましては、此れまでの経験を十二分に生かし、細心の注意を払い、且つ充分な救助体制を持って遭難等の防止に全力を尽します。

万一、不幸にして遭難等が発生した場合には、下記の電略をもって直ちにご連絡申し上げますので、関係方面へのご連絡及び救助用ヘリコプター出動等に関しまして特段の御配慮を賜りたく存じます。

尚、ヘリコプター出動費を含めて救援活動に要した一切の経費は本隊において責任を持ってお支払い致しますと共に、事後措置につきましても万全を期すものとし、一切貴官にご迷惑をおかけしないことを誓約致します。

記

1．隊　名：日本ヒマラヤ協会女子登山隊1987年
　(英文名)　HAJ Ladies Himalaya Expedition 1987
2．連絡電略名：　HLHE87

入国通知書

Ref. NO.　　Date: 25th June 1987

The Honorary Secretary

Indian Mountaineering Foundation
Near Ram Lal Anand College,
Anand Niketan Road,
New Delhi-110 021,
INDIA

Sir,
Thank you for your kindness to our expedition for Mt.NUN in this summer. Today I inform you as follows;
So please kindly take all things into considerration and arrange for us.

1) Date of arrival at New Delhi
All members of expediton will arrive on 26th July 1987.

2) Date of departure from Delhi to Srinagar
We will start to Srinagar on 30th July by airplane.

3) Date of to brief with our liaison officer at IMF
We wish that we discuss for our expedition with our liaison officer on 27th July at IMF. So please kindly contact our liaison officer.

4) Liaison office in Delhi
Shikhar Travels (P) Ltd.
209, Competent House, F-14, Middle Circle,
Connaught Circus, New Delhi-110 001
Tel 331-2444, 331-2666

5) Hotel in Delhi
Y.M.C.A. Tourist Hotel
Jai Lingh Road, New Delhi-1,
Tel 311-915

Please kindly help us.

With warm regard,

Yours sincerely,

Mrs.Keiko KOIZUMI
Member of HAJ Ladies Himalaya Exp.'87

などをある程度理解して頂くための家族会である。

隊員によっては、自分の肉親に対して充分な説明をしなかったり、自分だけは絶対に大丈夫だからと云った変な安心感を与えたりして出かけて行く人も見られるが、これは隊長や派遣母体に対する裏切りである。心配をかけたくない、参加することに反対されたくない、と云った気持が説明を曖昧にしたり、不都合な部分は口をつぐんでしまったりするのであろう。

事が起ってからあれこれもめないためにも、本人が云いにくい事を隊長及び派遣母体の責任者が、きちんと隊員の家族に説明しておく必要がある。説明の要領としては大体以下のような事を参考にされたい。

1) 登山隊の計画概要

登山計画の趣旨と経緯、隊員構成、日程の概要、派遣母体の組織、登山隊の経費など。

2) インドヒマラヤの特殊性

目標山岳の地域、首都デリーからの距離・日数、山の高度（日本の山との違いと比較）、気候など。

3) 事故発生時の対応

緊急時の連絡網、救助態勢、ヘリコプターによる救助活動の現地事情（ヘリコプター依頼の連絡方法、ヘリコプターの性能とロケーションによる救助活動の限界）、留守本部の対応、家族の現地往訪の対応、保険及び遭難事故の経費負担など。

以上のような点について判り易く説明し、各家族に不明な点が残らぬようにしておくべきである。

チベットとその周辺の少数民族たち

山森 欣一

アリ（阿里）のチベット族

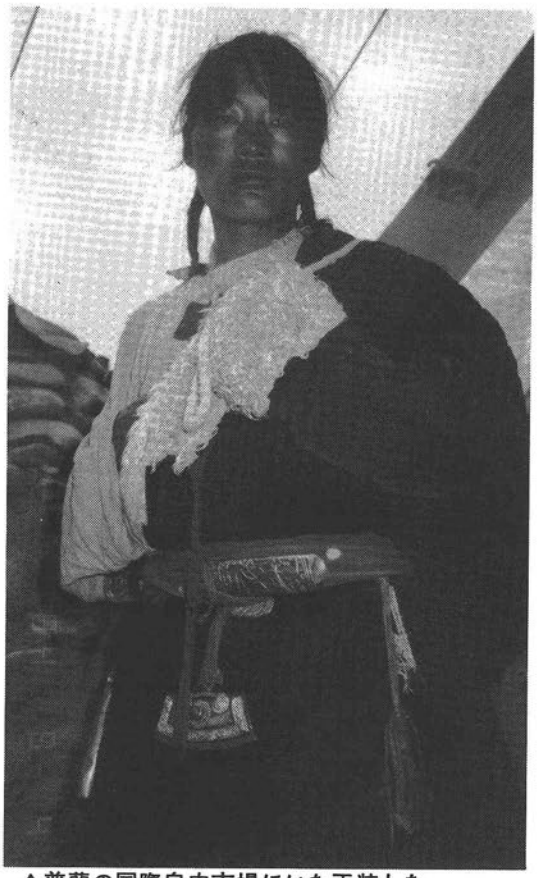
(1) チャンタン高原

現在のチベット自治区の行政区分は、一の市（ラサ）と六つの地区（昌都、林芝、山南、日喀則、那曲、阿里）となっているが、これを大きく昌都、林芝を東チベット、阿里を西チベット、那曲を北チベット、ラサ、日喀則、山南を南チベットと分けることも出来るだろう。ここではその西チベット阿里地区を紹介したい。

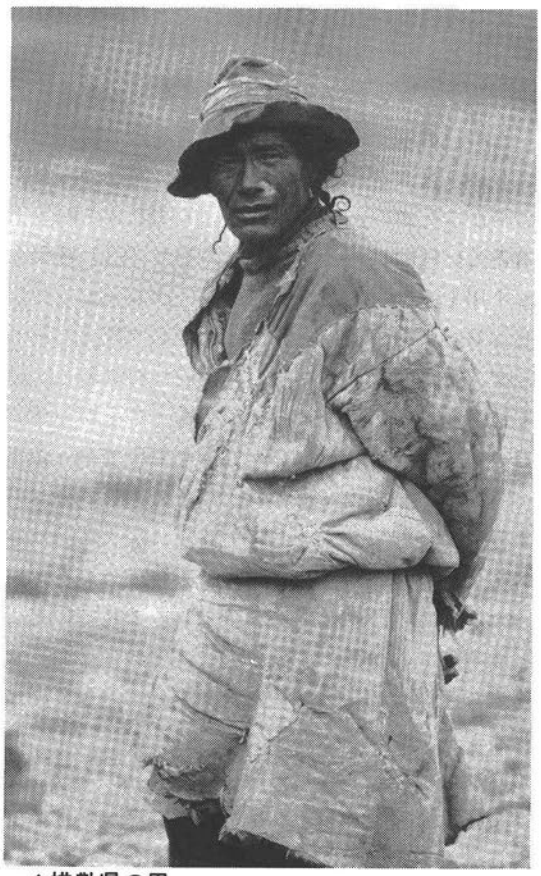
チベット高原の中核を成すチャンタン高原の中でもアリ地区は人跡稀れな奥地として、寒冷で酸素が薄く交通不便なところから不毛の地とされてきた。しかし、実際のアリ地区のチャンタン高原は広々とした草原に湖沼が点在し、山々は頂上付近までヨモギ色に染まる別天地でもあった。これは私が訪れた時期が夏の一番過し易すい頃の印象である。

現在のアリ地区は、面積が日本とほぼ同じ広さで人口はわずかに5万人だという。家畜の数は那曲地区に及ばないが、羊の約300万頭ヤクが十数万頭といわれている。

日喀則（シガツェ）から拉孜（ラズー）の先で中尼友好道路と別れて、ヤル・ツァンポー川をハシケで左岸に渡るとナプシ村である。左岸沿いに定久（テンジュー）に至りその先22道班（チベッ



▲普蘭の国際自由市場にいた正装したチャンタン高原民



▲措勤県の男

トでは公路には10㎞に一つの道班と呼ばれる道路補修の拠点がある）で北へ登るとチャンタン高原となる。既に定久で標高は4,670ｍとなり、チャンタン高原に向けてドンドンと標高は上がる。

草原の中のわだちを拾うように進む。5,000ｍを越えると突然雪が降り出した。チベットのロバが一頭ジープと競争するがごとく草原を疾走する。

この付近はチベット人のテントもほとんど見当らない。大きな打加湖の付近には、雪を被ったたおやかな6,000ｍ峰が見える。5,450ｍの峠を下ると広い河原に出る。ジープの速度を落し幾条もの小川を横切って行く。河原をチベットガゼルがピョンピョンと尻を振りながらはねて行く。

夕方になりよどんだ淵の人工的な村に着く。遠くに青白く山が浮び、村の様子もどことなく暗い。ここが措勤である。村の人は今まで下で会ったチベット人と一風変っていた。まるでメキシカンのような服装と顔立ちをしている。外国人に開放されていないため地元のチベット人が使うフトンに寝た。彼等の汗や匂いが充分にしみこんでいた。

5,000ｍの草原に鳴きウサギが無数にいた。穴を堀り運動会のように走り廻っている。達瓦湖にはインドガンが群れる。

夏康堅山脈を左に見る頃には、ジープも80㎞ほどで走れる草原となり、広大な草原に湖が浮び上がる「逃げ水」を見る頃には、那曲から獅泉河へとチャンタン高原の中央を東西に走る、軍事用道路に出る。道路には国家水準点を示す標石が立つ。

遥か西の彼方に竜巻が上がり、黒雲が湧く。その中に突込むように砂が多くなった草原を進む。全く止むを得ず中継点として作られたような「改則」の村に入る。

▲改則県招待所の服務員

▼聂尔湖の遊牧民の子供達

アリ地区で一番規模の大きな「改則県」であるが、人口は約11,000人この村は250人位いである。招待所は城郭のように四角な塀で囲まれ、その外側に地元遊牧の民達や商人達のテントが張られていた。招待所には電気がなくローソクである。冬用のストーブが用意してある。

高原の招待所は、客が着くとブリキで出来た魔法ビンと洗面器とお茶を持ってくる。連絡官など漢族は顔や手と共に必ず足を洗うことを忘れない。昔の日本でも旅人が宿に着くと、わらじを脱いで足を洗ったのと同じことだろう。措勤ではこのサービスすらなかった。

朝の気温は4℃と低い。招待所を出てこの高原に入って初めて木を見た。木と云っても背の低い灌木である。一人のチベット女性が歩いている。見渡す限り広い草原でテントの一つも無いのにどこに行くのであろうか。この地区には塩湖が多い。湖の底や干潟から塩を採る。それは岩塩と違って白く美しい。チャンタン高原に住むチベット遊牧民にとっては、羊やヤクと同様に重要な資源だ。

塩湖という村では数十頭の馬が市に出ていた。見ていると商談が成立したのは一頭だけだった。この高原で出合ったチベット人達は、必ず馬を連れているが、いつも馬に乗っているとは限らない。馬は綺麗に飾られて大事にされている。

改則から革吉の間は、人家が無く無人地帯で3日間必要と言われたが、草原には思い出したように放牧のテントが見えた。塩湖から一気に南に向かうと一山が白くなるほど羊が群れていた。マーモットが尻をユーモラスに振りながら穴にもぐり込む。池塘の多い聂尔湖付近の岩山にはウサギが走り廻っていた。チベット犬のすぐ側までジープを着けてチベット遊牧民のテントに寄る。

チャンタン高原に住むチベット人は、昔ながらのテント生活をする者と、洋服に着替えて公務員として働らく者がいる。人民解放軍のほとんどは漢族などの若者である。この湖の付近で放牧している家族の生活は、外からみると粗末な身なりではあるが豊かそうであった。

▲改則県での気象観測を見物するチベット人

革吉が近づくと草原は、半砂漠化して車輪が埋まるようになった。革吉の招待所では、私達が到着するのを首を長くして待っていた。埃にまみれた車はたちまちに磨き上げられた。裏手にある大岩壁の取付きには、馬、羊などの骨塚があった。大岩壁を登って頂上に立つと、遥か南東に細く長い川が蛇行し、川面が時々キラリと光っている。そこがインダス川の源流部であった。

■寸　感■

高校時代から16年間もの長い間、共に影響しあいながら、故郷の山々からヒマラヤの高峰へと彷徨したかけがえのない岳友(とも)が、ある日忽然とガルワール・ヒマラヤの雪嶺に消息を絶った。神々の寝所に召されたのである。

やがて時は流れ、あの悪夢のような出来事から早、6年の星霜を重ねると云う。此の程、彼の7回忌法要を前に古いカメラード達が彼の故郷の山の出湯に集った。懐しい8ミリ映画を観、彼の肉声の吹き込まれたカセットテープを聞いていると瞬時に昔日の懐しい想い出が呼び起される。亡くなりし岳友は、その時点のままで歳をとることがないが、久々に会した仲間達は、頭に白いものが混りはじめた者、子供の話しをする者などそれぞれに6年の歳月が感じられた。自己紹介の中で「あの人は私の命の恩人です。彼に助けて貰わなければ、この子も生まれませんでしたし、父親にもなれませんでした。」と挨拶した後輩が居た。谷川岳の岩場で九死に一生を得たこの後輩の言葉を聞いていて、改めて生きていればなあ〜との想いを強くさせられた。

ピンダリ河の対岸に聳えるナンダ・コットへ立教大が登頂50周年を記念して再挑戦すると云う。

事務局日誌　(9月)

3日（木）　ＨＡＪ女子ヌン隊からデリー帰着の電話有り。
6日（日）　ＨＡＪ女子ヌン隊の木下、小泉、市川の3名帰国
9日（水）　雪宝頂報告書搬入
10日（木）　ラプチェ・カン隊出発
12日（土）　ヒマラヤ№191発送
12日（土）〜13日（日）　前柴田会長を囲む会（御岳山・尾形）
17日（木）　ギャラ・ペリ報告書搬入
25日（金）　中・ソ辺境旅遊隊出発
28日（月）　東京集会（17名）

ヒマラヤ No.192（11月号）

昭和62年10月10日印刷　62年11月1日発行

発行人　遠藤　登
編集人　尾形好雄
発行所　日本ヒマラヤ協会
〒160　東京都新宿区高田馬場3－23－1
淀橋食糧ビル506号

天府の霊峰

雪　宝　頂

1986年夏、ＨＡＪは四川省登山協会との合同で岷山々脈の最高峰、雪宝頂（5,588ｍ）へ登山隊を派遣した。登山は日中登攀隊員14名中、13名が8月5日、6日の両日に亘って初登頂に成功した。

此の程、この日中友好の足跡を記した報告書が上梓された。

Ｂ5版、64ページ、カラー写真8ページ、モノクロ写真多数

（頒　価）　1,700円（送料込み）

（連絡先）〒-160 東京都新宿区高田馬場3-23-1
淀橋食糧ビル506　日本ヒマラヤ協会

謎の河の秘峰

ギャラ・ペリ

ヒマラヤの謎の河として知られるヤル・ツァンポー河の大湾曲部には、南にナムチャバルワ、北にギャラ・ペリと云う2つの玉峰が対峙している。

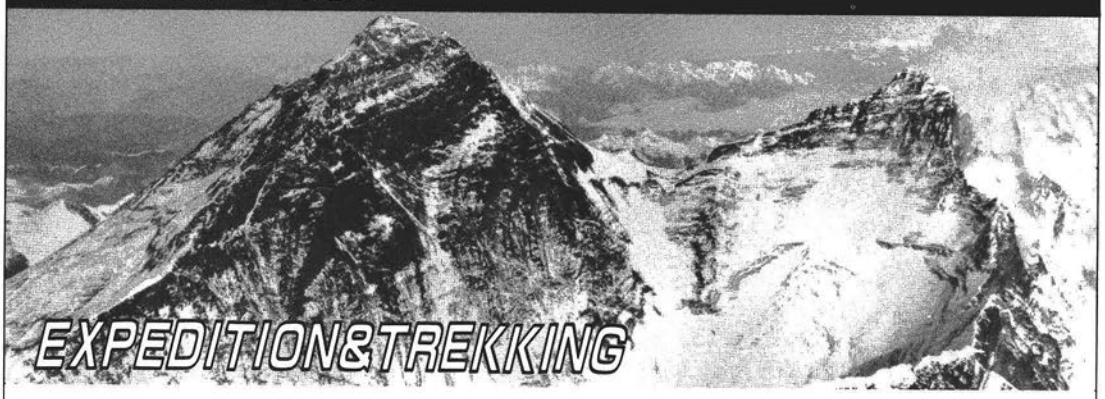
1986年秋、ＨＡＪ隊は悪天候に苦しめられながらも先ず手初めにこのギャラ・ペリを陥落した。中国登山に関する資料が豊富に盛込まれている。

Ｂ5版　127ページ、カラー写真4ページ、モノクロ写真12ページ。

（頒　価）　2,000円（送料込み）

（連絡先）〒-160 東京都新宿区高田馬場3-23-1
淀橋食糧ビル506　日本ヒマラヤ協会

TREASURE TOUR



自分の旅だから、自分でつくる。そんなあなたを応援いたします。

——遠征隊、トレッキング、秘境への旅——

あらゆる申請・許可取得、現地手配、航空券、山岳保険など、
お客様のご要望に遠征経験豊富なスタッフがお答えします。

マウンテントラベル株式会社
〒105 東京都港区新橋3-26-3 会計ビル4F
☎03-574-8880
三井航空サービス代理店2452号

トレッキング・登山隊の許可取得から航空券・現地手配までお引き受けいたします。

～ネパール・インド・ブータン・パキスタン・東南アジア・アフリカ・南米～

トレッキング・海外登山
シルクロード・秘境旅行
のパイオニア

株式会社 西遊旅行

東京本社　〒101 東京都千代田区神田神保町２－２　新世界ビル５階　☎03(237)1391(代表)
大阪営業所〒541 大阪市東区平野町4-53-3ニューライフ平野町202号室 ☎06(202)1391(代表)
カトマンズ営業所　JAI HIMAL TREKKING (P) Ltd. P. O. BOX 3017
KATHMANDU, NEPAL ☎221707
運輸大臣登録一般旅行業６０７号

ヒマラヤへの装備

◎遠征隊の装備、相談にのります。

ICI 石井スポーツ

- 登山本店／〒160東京都新宿区百人町2丁目2番3号☎03(208)6601～3
- 大宮店／〒330埼玉県大宮市宮町2丁目123番地☎0486(41)5707
- 水道橋登山店／〒101東京都千代田区三崎町2丁目8番14号☎03(264)5575～6
- 神田登山店／〒101東京都千代田区神田神保町1丁目8番地☎03(295)0622
- 新宿西口店／〒160東京都新宿区新宿1丁目16番7号☎03(346)0301(代)
- 高崎店／〒370群馬県高崎市新町6番地☎0273(27)2397(代)
- 札幌登山店／〒060北海道札幌市中央区南二条西4丁目4番☎011(222)5305
- 新潟店／〒950新潟県新潟市東大通2丁目5番1号☎0252(43)6330
- 仙台店／〒980宮城県仙台市東八番丁107番地の36号☎0222(97)2442
- 町田ジョルナ店／〒194東京都町田市原町田6丁目6番地14号☎0427(26)6248(代)
- フーズショップ／〒160東京都新宿区百人町2丁目2番43号☎03(232)1286
- 外商部／〒160東京都新宿区大久保2丁目19番10号☎03(200)7219
- 事務所／〒160東京都新宿区百人町1丁目4番15号☎03(200)1004